

華かがりの大果安定供給が可能となる 新たな作型を開発しました

県が育成したイチゴ品種「華かがり」は、大果率が高い特性を生かして化粧箱等の贈答用需要に合わせた高級路線のアイテムを展開しています。通常の間型では年末年始の需要期を含め大果の生産量が少なくなる時期がある弱点がありました。そこで、育苗期の電照処理により頂花房の形成時期をコントロールし、通常間型に比べ収穫開始時期を遅らせ、収穫の谷を補う間型を開発しました。この間型を組み合わせることで冬期の大果安定生産が可能となりました。

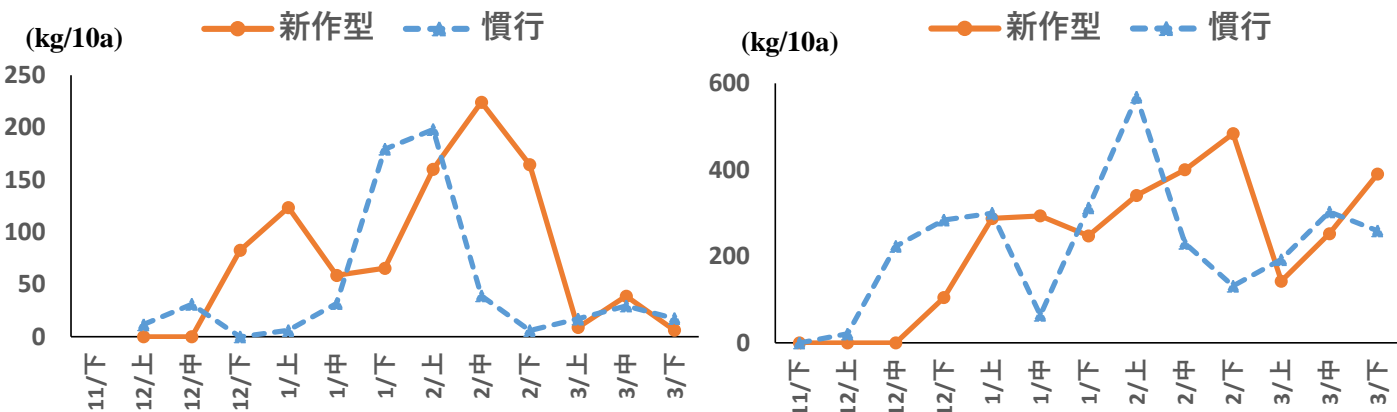


図1 化粧箱相当果実(左)・20g以上大果(右)の収穫量の推移

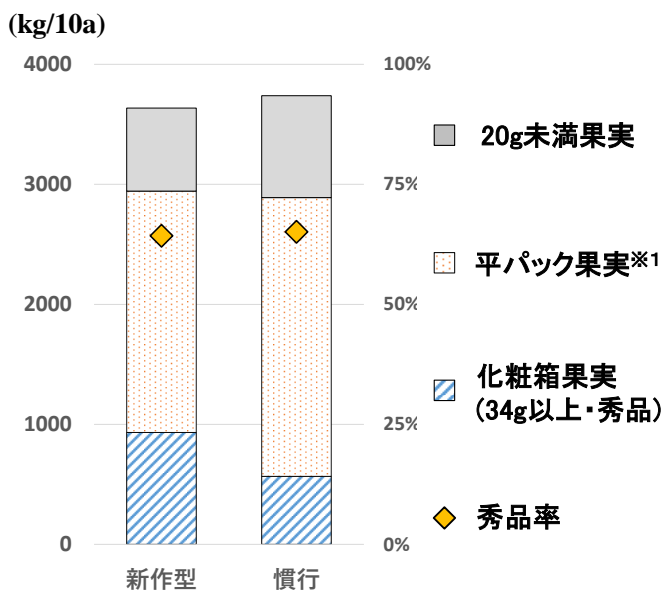


図2 規格別収量と秀品率(3月末まで)

※1 平パック=20g以上優品および20g~34g秀品

表1 新作型の1作あたりの収支試算(円/10a)

項目	金額	備考
①導入経費	44,000	電照資材費※1
②ランニングコスト	10,279	肥料代・電気代
③増益分	357,000	慣行と比べた収入増加分
収支(③-①-②)	302,721	

※1 減価償却5年

(研究成果)

- ・新作型は①育苗期の8月中旬から30日間の電照、②7月採苗、③育苗期の施肥を2回とし施肥量を増量の①~③の処理を組み合わせます。
- ・新作型では、年末年始の化粧箱生産量が増加します。また、慣行栽培の大果生産の谷間を補うことができます。
- ・新作型の3月までの収量・秀品率は、慣行栽培とほぼ同等となります。
- ・新作型の収支は、慣行栽培に比べて約30万円/10aの収益増加が見込めます。